

能登地域における弥生時代の墓制

林 大智（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

はじめに

弥生時代を象徴する墓制である方形周溝墓は、弥生時代中期中葉に能登地域で受容され、本格的な弥生文化が展開する中期後葉に至り、当地域における墓制の主体を占めるようになった。

本稿では、この方形周溝墓に代表される区画墓と、墳丘や区画施設をもたない土坑・木棺墓を整理することにより、能登・北加賀地域における弥生墓制の特徴とその変遷過程を明示していきたい。

1 区画墓の規模と平面形態の変遷（第1・2図）

方形周溝墓が普及する中期後葉には、長軸5～8mの墳丘規模を有するものが主体となる。長軸10mを超える大型墓は墓群中に1・2基程度存在し、すでに規模的格差を明確に見出せる。墳丘平面形態は長方形を呈するものが多く、周溝形態は東海系譜と推測されるg類を主体に、多数の系統が混在する。

後期前葉～後葉には、台状墓を主体に長軸15mを超える大型墓が出現し、小・中型墓の平面形態は正方形化する傾向が窺える。周溝形態はg類がさらに増加し、a類以外の系統が衰退・消滅する。

墳丘規模の格差が明確になる終末期には、長軸15mを超える大型墓が増加する反面、長軸5m以下の小型墓がほぼ消滅する。周溝形態は引き続きg類が主体を占めるなか、a類が増加する傾向を窺える。

2 区画墓上の埋葬施設数と墳丘規模の関係

中期の方形周溝墓は、埋葬施設を墳丘中央に単数設置するものが圧倒的多数を占める。

後期になると、丘陵上に立地する区画墓で、複数の埋葬施設を設置するものが増加し、なかでも、大型の台状墓で4基以上の多数埋葬が顕著に認められる。一方、低地に立地する方形周溝墓は、中期と同様に墳丘中央の単数埋葬を主体としたものが多く確認できる。

終末期には、再び単数埋葬が増加し、大型の台状墓でも単数埋葬のものが出現する。丘陵上に立地する区画墓では、依然複数埋葬を主体とするが、多数埋葬は大幅に減少する。

3 木棺の規模と副葬頻度の推移（第3図、第1表）

中期の木棺は、Ⅱ型木棺（福永 1985）を主体とし、規模は長軸0.8～1mと1.3～2m程度のまとまりが見出され、前者が小児棺、後者が成人棺に対応する可能性が高い。木棺・墓坑規模とともに、無墳丘の木棺墓が卓越し、副葬品の出現頻度も高い傾向を窺える。

後期にはⅠ型木棺が増加し、中能登町吉田経塚山遺跡で検出したⅠ・Ⅲ型を折衷したような木棺と共に、山陰・北近畿などの日本海沿岸地域からの影響が色濃い。この時期には、副葬品として鉄器やガラス小玉が出現し、区画墓内埋葬施設への副葬も増加するが、無墳丘の土坑・木棺墓と出現頻度は変わらない。木棺規模は長軸1.4m程度を境とするまとまりが存在し、中期と比べて長大化する。

終末期には、再びⅡ型木棺が主体となると共に、刳抜式木棺が顕在化する。刳抜式木棺は台状墓の中心埋葬にはほぼ限定的に用いられるため、階層上位の木棺型式と考えられる。木棺の長大化や墓坑の大型化が進展する一方で、長軸1m以下の小規模木棺がほぼ消滅する。副葬品の出現頻度は、区画墓の中心埋葬施設が最も高くなり、鉄製武器の副葬も中心埋葬にはほぼ限定される。

4 墳墓の構成と集落・墓域の位置関係（第4・5図）

方形周溝墓が普及する以前の中期前葉～中葉には、居住域と隣接して木棺墓（中期中葉に導入開始）や土坑墓が2・3基程度の単位で墓域を構成するが、中期後葉に至り、この墓域に方形周溝墓が加わる。土坑・木棺墓と方形周溝墓はそれぞれ墓群を形成し、互いの墓群領域は隣接しながらも重複することは少ない。低地の遺跡では、後期に至ってもこのような墓群構成に大きな変化はみられない。

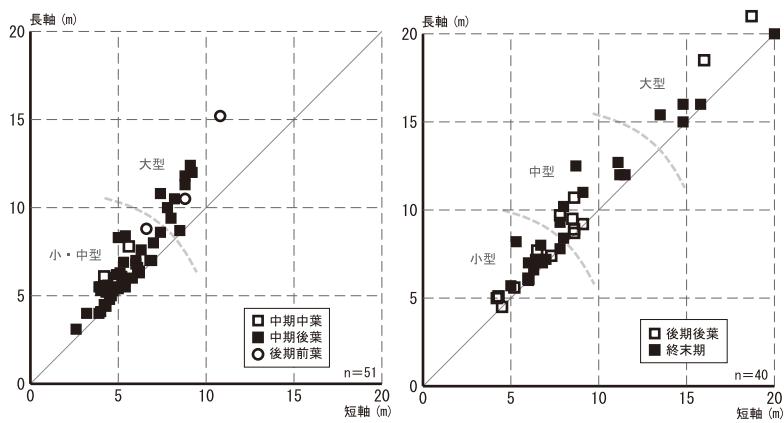
一方、後期前葉～後葉には、集落形成の困難な尾根上に台状墓が出現する。同時期の集落は、丘陵裾部や近接する台地上に営まれており、墳墓とその造営集落の間に距離や高低差が生じ始める。

終末期には、低地でも集落と墓域の乖離が明確になり、両者の間に河川や溝などを挟むことが多い。
おわりに

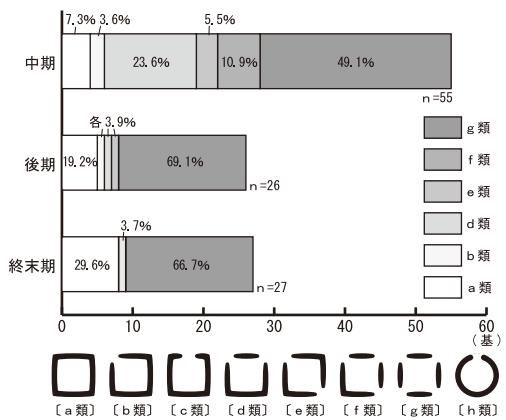
能登・北加賀地域における弥生時代墓制の整理により、集落と墓域の乖離や、墓域内から大型墓が隔絶化する過程が窺え、後期後葉にその変革期を見出すことができた。この時期は、区画墓墳丘上の多数埋葬、I型木棺の盛行と木棺の長大化、副葬品としてのガラス小玉や鉄製武器の導入など、山陰・北近畿に代表される日本海沿岸地域からの影響が色濃く窺え、これらの地域からもたらされた物資・情報などが、能登・北加賀地域で墓制変遷の画期を引き起こす大きな要因となったことを推測できる。

【引用・参考文献】

- 高橋浩二 2009 「北陸における弥生墓制」『中部の弥生時代研究』 中部の弥生時代研究刊行委員会
 戸谷邦隆・永井三郎 2010 『七野墳墓群発掘調査報告書』 七野古墳発掘調査会
 土肥富士夫ほか 1982 『細口源田山遺跡』 七尾市教育委員会
 福永伸哉 1985 「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号 考古学研究会
 前田清彦 1991 「方形周溝墓平面形態考」『古代文化』vol.43 財団法人古代学協会
 前田清彦 1999 「北陸の木棺墓とその展開」『北陸の考古学III』 石川考古学研究会



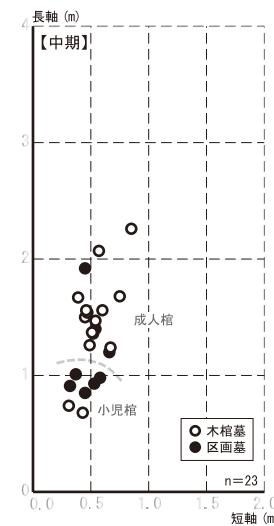
第1図 方形周溝墓と台状墓の墳丘規模



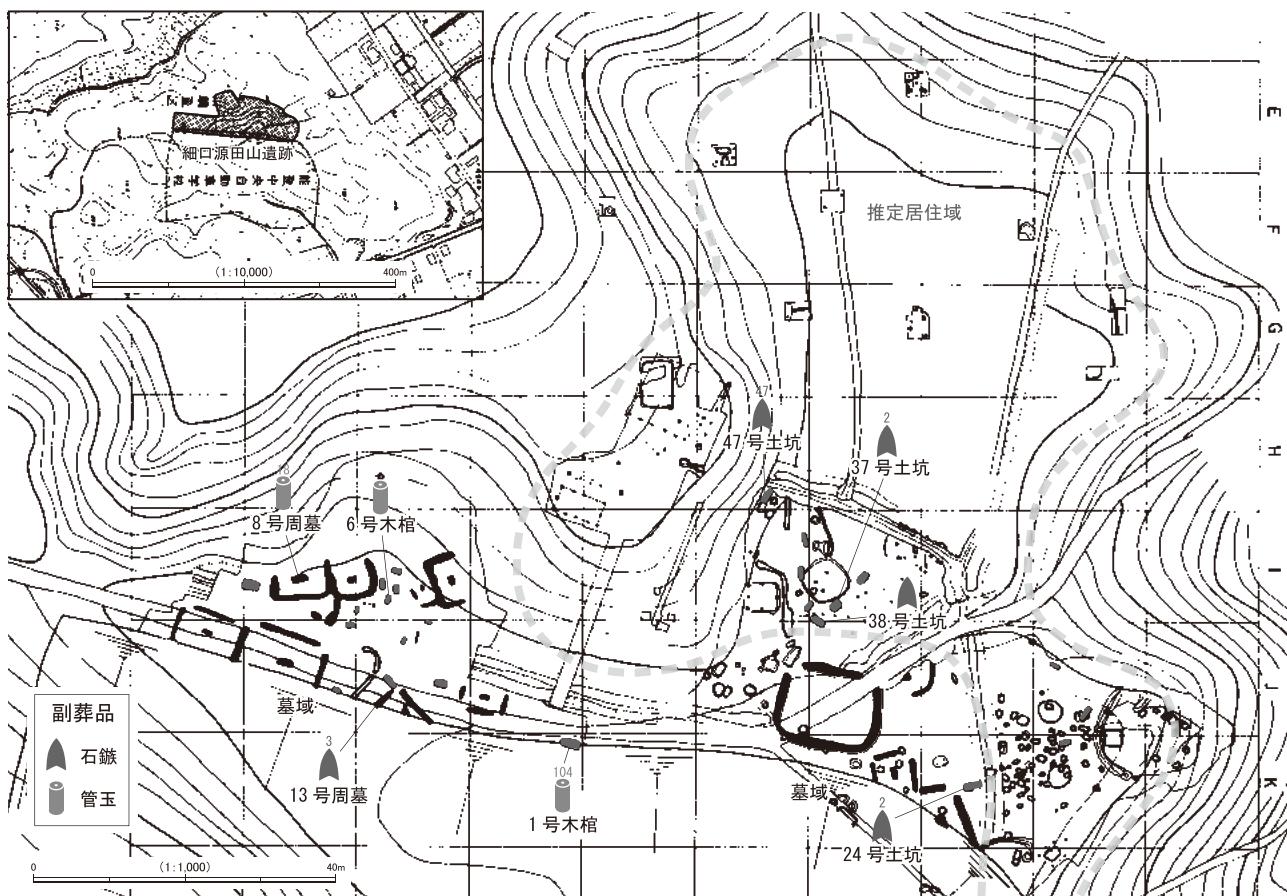
第2図 周溝墓平面形態の変遷

第1表 埋葬施設の副葬品出現頻度

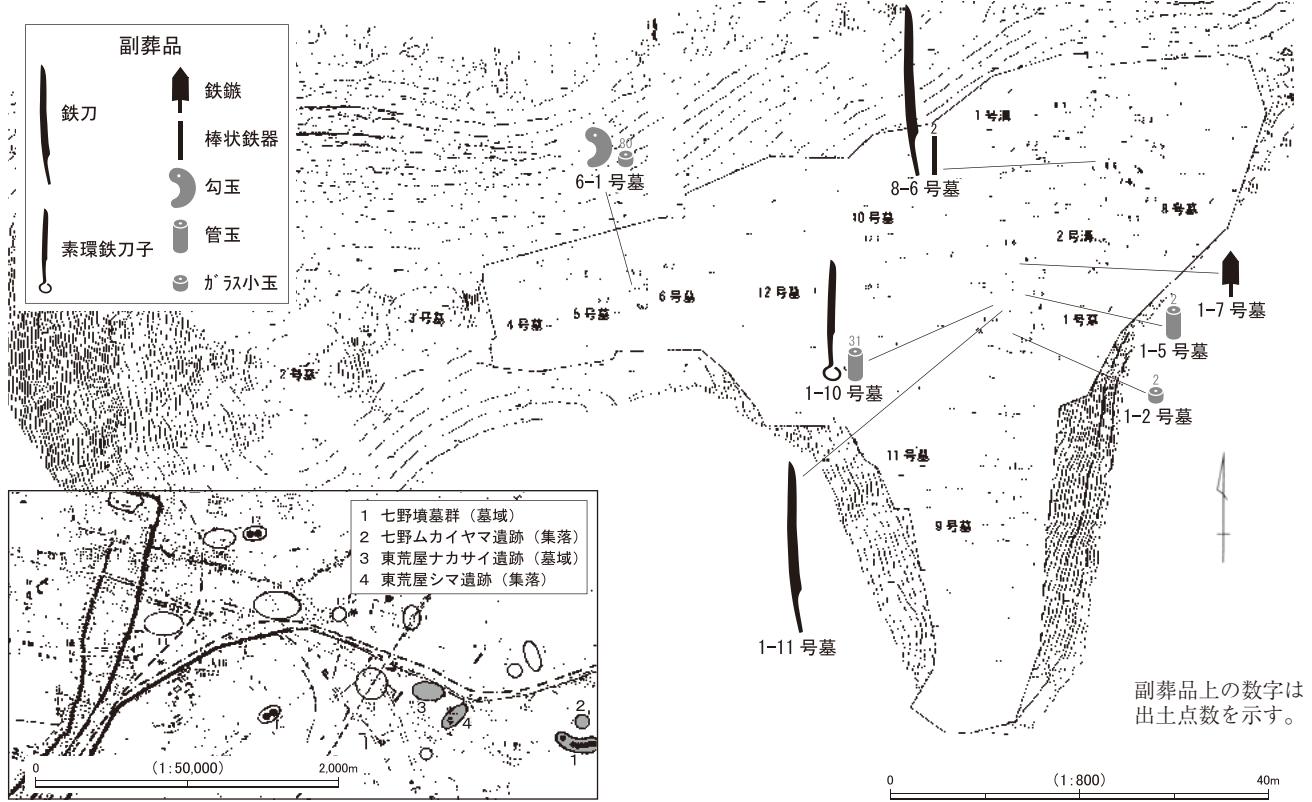
[中期]			
墳墓種別	埋葬施設	総数	副葬
区画墓	土坑墓	12	0 0%
	木棺墓	11	2 18.2%
[後期]			
区画墓 (中心)	土坑墓	3	0 0%
	木棺墓	10	3 33.3%
区画墓 (周辺)	土坑墓	10	1 10%
	木棺墓	29	13 44.8%
単独	土坑墓	14	0 0%
	木棺墓	20	7 35%
[終末期]			
区画墓 (中心)	土坑墓	2	0 0%
	木棺墓	18	8 44.4%
区画墓 (周辺)	土坑墓	1	0 0%
	木棺墓	19	3 15.8%
単独	土坑墓	1	1 100%
	木棺墓	4	0 0%



第3図 木棺規模の変遷



第4図 七尾市細口源田山遺跡の位置と主要遺構配置図



第5図 津幡町七野墳墓群と周辺の関連遺跡